子どもに幸福を……

合併教育はよいか

清水桔梗

(一) はじめ

五才児の一年保育児と、二年保育の二年目の子どもとをいっしょに保育してよいかわるいかが問題になってきました。もしいっしょに保育してよいとするなら、一年保育と二年保育はあまりわからないということになります。いっしょに保育してはよくないと考えるなら、当然いっしょにできない理由があるわけでありましょう。

幼稚園ブームといわれた数年前に比べて、今年あたりは、だんだん産児制限の影響をうけて、子どもが減ってきているようです。大阪市のようすを考えて見ましても、数年前は一年保育児だけでも収容しきれなかった程で、随分幼い子どもを悲しませたものでしたが、今年は、二年保育児も募集していて、定員に満たない園が施設数の半数以上もある位になりました。応募者数が、うまく一組の定員数で割って落ちつく場合はよろしいが、落ちつかない時は、二年保育の二年目の子どもと、一年保育児との混合、あるいは、一年保育児と二年保育の年少児とを混合しなければならない場合もおこってくると思います。その場合、行政的立場から割り出された組編成にするか、教育的立場から考えた組織にするかは、かかって教師の熱意如何によるものではないでしょうか。

私は、一年保育児と二年保育の二年目の子どもといっしょに保育すること、または、一年保育児、二年保育児の、新入児をいっしょに保育することは、ともに労多く効の少ない保育の結果になると思います。そこで、どんな事情がありましょうとも、なるべく別々の組編成で保育をすすめたいとねがう者であります。

(二) 子どもには、子どもながらのプライドを

一年保育児と二年保育の二年目の子どもとをともに保育いたしますと、しらずしらずのうちに、新入の子どものプライドがきずつけられると思います。子どもは無関心なようですけれども、非常に感覚が鋭敏です。おとなも及ばない程敏感です。うっかりして教師が、

幼稚園の生活に馴れている二年目の子どもばかりに話かけでもしたら、だんだん幼稚園にくることをいやがるかもしれません。「幼稚園に行くのがいやだ」といって、自己の意志を押しすすめて行ける子どもはまだ幸福です。意志表示のできない子どもだったら、だんだん萎縮してしまって、ついには身体の発育を阻害するおそれがあるかもしれません。二年目の子どもは一応、園の生活には馴れているし、教師の意志も素早くキャッチすることができるでしょうし、何かにつけて機敏に立ちまわれます。それに反して新入一年保育児は、すべてが未経験ですから、おどおどしていることでしょう。

ある小学校の一年生で、能力別指導を始められました。この指導法に真正面から反対されたのは保護者でしたが、全面的に賛成したのは、クラスの子どもたちだったのです。即ち前も、隣りも、うしろも、皆同じ仕事をするという喜びを持ったことです。ここに子どもの大きい安定感が得られているわけです。このことと、幼稚園のそれとは、必ずしも同じ問題ではありませんが、周囲に生活に馴れた子どものいることは、小さければ小さいだけ、よけいにいらいらすることと思います。

私の園では、昨年の四月、行政的立場から、一年保育児と二年保育の二年目の子どもとを同じ組に編成して保育をすすめてきました。

入園当初、新入の子どもも、前からいる馴れた子どもも、身体検査をいたしました。それからまる一ヶ月経ちました時、再び身体計測をいたしました。その結果から判断いたしますと、二年目の子どもの約半数近くが、体重減になっています。これに対して新入一年保育児は、殆んどの子どもが減っています。ちょうどその割合は、二年目の子どもで四七・八パーセント、一年保育児では八一・八パーセントになっています。しかもそのへり方が、二年目の子どもは平均〇・一一キログラムに対して、新入児は〇・二九キログラムになっています。二年目の子どもは、四月までは、病気でからだをいためていない限り、例外なく体重が増加しておりましたのに、新入園児と合併保育を行うと、一ケ月目の計測では、このように約半数の子どもが減じているというこの事実、まして園生活に馴れない子どもが、馴れた子どもから押され気味の生活を続ける一年保育児の、体重のへるのももっともなことと思われます。

子どもたちのメンタルハイジーンの上からも、プライドをきずつけるという上からも、生活の異った者の合併保育はよくないと思います。この体重減はいつの日に回復することでしょう。

（三）子どもには、なるべく早く幸福な生活を

子どもの精神機能の発育状態はまちまちであります。知覚とか注意力とか、あるいは、記憶とか言語とか、または数とか概念とか、一応いろいろ発育の途上にありますが、音楽感情と、大いさの精神機能は、幼児期に完成するのであります。完成期を前にして、その生活を存分にさせますなら、いよいよその機能が成熟するのです。幼稚園での音楽リズム教育、絵画製作、あるいは自然観察の教育によって、大いさや音楽感情が練られることは間違いのない事実であります。

戦後の家庭生活は、アメリカの影響をうけて、戦前に比べて文化の水準が高まってきました。とはいうものの、ラジオで、子どもの喜ぶような音楽をふんだんにかけている家庭

がどれ程あるでしょうか。万才がかかっていたり、落語がかかっていたりして、子どもの心の糧となる水準のかなり高い音楽などを聞く生活が、なかなかくりひろげられないのです。ところが幼稚園では、子どもに親しまれる音楽、子どもの心をなごやかにするような音楽などが、随時流されてきますので、子どもたちはいやが上にも楽しくきくわけであります。大いさについても同じことが云えます。家庭では、ものの大小、軽重、長短、広い狭いなどの比較のできる生活がそんなに度々あるわけではありません。幼稚園では、同じ欲求を旺盛に持っている子ども同志の生活ですもの、何かにつけて、大小、軽重、長短、広い狭いなどが問題になり、自己主張の生活がくりひろげられるわけです。子どもたちが幼稚園生活をしておればこそ、音楽感情や大いさのわかる機能が修練されるわけで、この時期をはずしては効果があまりあがらないのです。即ち、子どもの幸福は、一日でも早く幼稚園教育を受けさせることから得られるわけであります。

（四）子どもには、発達の段階に即した指導を

子どもを最も効果的に指導する秘訣は、子どもの発達の段階に即した適切な方法によることであります。

子どもの発達は、その生活形態、生活集団、生活環境などによって、ちがった段階となって、生活の上に、ものの考え方の上にあらわれてくるものです。また、生年月日によっても、四月生れの子どもと三月生れの子どもとでは、発達が随分ちがいます。

一例をあげて見ましょう。五月半ばになりますと、お弁当がはじまります。バスケットのなかへ、たべたあとのお弁当箱を片付ける際、殆んどの子どもが風呂敷やハンカチに包んで入れます。わけなく四隅を結んで片付ける子どもは、四月五月生れの子どもや、大勢のきょうだいのなかに育った子どもたちで、どうしても結べない子どもは、例外なしに一月二月三月生れの子どもや、一人っ子、末っ子であります。これを同時に保育する教師の苦労はなみたいていではありません。

この一例でもわかりますように、同じ年間に生れた子どもでも、早いおそいによって、あるいは、生活環境その他によって、相当具体的な姿に差異があらわれてきます。まして、自主自立、自己立法、自発活動の満足などをモットーにして、一年間保育を受けてきた子どもと、はじめて集団生活を営もうとする子どもたちとを、同じ保育室に集めて保育することは、いたずらに教師をいらつかせるだけであります。都会でも農山漁村でも、組編成を生年月日順にわけておられる幼稚園がかなりあります。そこでは最少限ではありますが、発達の段階を考慮して組織しておられるわけで、ここでは一年保育児と二年目の子どもとを同じように扱われることはないでしょう。

（五）子どもには、要求の満足できる場を

どの子どもでも、四年乃至五年の生活を基盤にしての要求をもっていることですし、その要求の満足される生活を望んでいることでしょう。幼稚園で一年間必要を充たされてきた子どもは、二年目には更に大きい望みをもって毎日を過すことでしょう。この子どもたちは、おそらく、友だちと協力して遊べる場

と遊具がほしいでしょう。また、大きく存分に意志表示のできる場もほしいでしょう。あるいは、かなり複雑なものを構成したいという要求の満足される場もほしいにちがいありません。この子どもたちに対して新入児は、最初は、まわりに大勢の友だちがいることさえ、わずらわしく思うことでしょう。夏の休暇を迎える頃でも、集団生活に似て否な並行遊びに終始してしまう子どもがある位です。自分の考えや集団の力で、もりもりやっていきたい要求の強い二年目の子どもと、一年保育児とが同時に保育できるでしょうか。もし同時に保育ができていたとしたら、それは、二年目の子どもの発達をストップしていたにちがいありません。

（六）おわり

以上のように述べてきましたが、現実の問題となると、そう簡単に割切れるものではありません。したがって、二年目の子どもと一年保育児とを、一クラスに編成しなければならない場合がおこってくるでしょう。その時には、少なくとも、二年目の子どもをストップさせないように、新入児と二年目の子どもとの二つのグループにわけて適切な保育をするようにしたいものです。あるいは、二年目の子どもをすべての一年保育児の組へばらまいて、幼稚園生活の先達にすることもよいでしょう。けれども、ここでは新入児のプライドをきずつけないようにじゅうぶん考慮しなければなりません。それよりも、二年保育の年少児を保育することについて、教師はもっともっと成長発達の段階、心理的要求などなど配慮しなければならないと思います。

「可哀想だ」とか、「できるもの」とか云って、年長児年少児を同じような保育内容と計画で、保育をすすめていく幼稚園が時にあります。これは教師の感情的な愛情の発露によるだけで、そこには何の教育的配慮もないわけであります。同じ場所に遠足させたり、同じ紙芝居や幻燈を見せたりするから、いやにませてしまって、二年目には、さわぎをおこさせるだけになってしまうのです。そしてこの子どもたちが新入児に対して何となく抑圧を与えているようにもなるのです。こんなことなど考えて、二年目を迎えても、やっぱり、一年保育児といっしょにしないことがよいと結論したいのです。

では小学校に行った時、一年保育児と二年保育児と差がついていたら困らないだろうかということが考えられましょう。当分は困りましょう。けれども年令が進むにしたがって、その差は最初は五分の一であったものが、十二歳にもなりますと、十二分の一になり、心配はうすらいでくるわけです。それよりも、人間の基礎に培うことは、力強いねばりのある性格、創造性のゆたかな性格、円満な社会性の基礎を植えつけるわけで、一年でも早く保育をするほうが効果的であります。したがって発達の段階や生活の相違を考慮にいれて、保育期間の違う者はできるだけ別々に保育することがよいと思います。

自己というものが、過去の生活の集積されたものと考えますなら、子どもたちに一年でも早くじゃうぶんに、よい生活を営ませるように考えるのが、成人の責任ではないでしょうか。しかも、その自己は、未来の生活の可能性なのであります。子どもたちがせっかく集積した年少一年の生活を、やたら反古にしないように、子どもの保育にあたりたいものです。

（大阪市立大宝幼稚園）